

イギリス図書館訪問記

西村 聡子

はじめに

2013年3月5日から11日にかけて、東京大学大学院経済学研究科から研修出張が認められ、イギリスの図書館を訪問する機会を得た。以下のようなスケジュールで4つの図書館を訪問した。

3月5日(火)	成田発 ロンドン着
3月6日(水)	British Library 見学
3月7日(木)	British Library Center for Conservation 見学
3月8日(金)	The School of Oriental and African Studies, University of London Library 訪問 The London School of Economics and Political Science Library 訪問
3月9日(土)	Bodleian Library 見学
3月10日(日)	ロンドン発
3月11日(月)	成田着

1. British Library (BL)

BL(大英図書館)は英国の国立図書館で1998年に現在のセント・パンクラス(St Pancras)に新しくオープンした。1億5千万点以上の多様な資料を有し、利用に供している。

今回は一般個人向けの館内見学ツアー British Library guided tour に参加した。月曜から土曜の午前と午後に開催されている。ホームページから予約が可能で料金は8ポンドで

あった。3月6日午前の参加者は筆者一人で、担当の Georgina Jones 氏が、予定時間を超えた1時間半、バックヤードも含めた館内を案内して下さった。



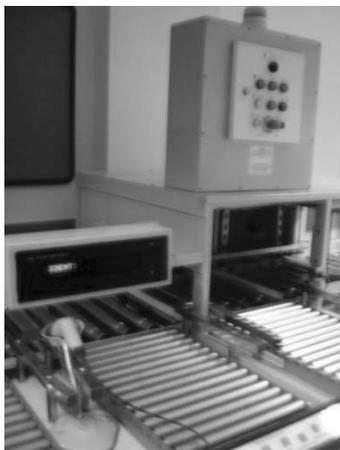
British Library 前の広場

館内には資料別、主題別の閲覧室(Asian & African Studies, Humanities, Manuscripts, Maps, Rare Books & Music, Science, Social Science)があり、専門のスタッフがいる。閲覧室の利用には Reader Pass の登録が必要である。外国人の登録も可能である。専門スタッフがいるので外国語の申請書類への対応も問題ないとのことであった。

閲覧室は建物の2~4階に分散しているが、館内やウエストヨークシャー州ボストンSPA(Boston Spa)にあるBLの書庫から取り寄せた資料はトレイに乗ってベルトコンベアで館内を移動し、利用者のいる閲覧室に届けられる。ステーションではバーコード付のスリッパで資料の移動を管理していた。

館内では展示も行われている。筆者が訪問

したときは *Murder in the Library* と *Mughal India: Art, Culture and Empire* の展示が行われていた。また *Sir John Ritblat Gallery* ではマグナカルタをはじめとする多くの貴重書が常設展示されており、誰でも見学することができる。館内にはカフェ、レストラン、ミュージアムショップ、友の会専用閲覧室もある。無料の Wi-Fi も用意されており、多くの利用者が指定の場所で自身のパソコンを利用していた。



ステーションでのベルトコンベアー

Business & IP Center は 2006 年にオープンしたビジネス支援サービスを提供する閲覧室である。特許を初めとする知的財産、ビジネス関係の資料やデータベースの利用ができるだけでなく、会議室の利用、講習会やワークショップへの参加、専門スタッフへの相談、企業家同士の情報交換が可能である。図書館が人と人を結びつけ、ビジネスを支援する場となっている。従来のレファレンスサービスを越えた新しい試みである。

BL でのオープンな資料の提供、建物、展示、IT 環境の整備、社会との連携は図書館が今後どのようなサービスを展開できるかについて多くのことを示唆している。筆者の所属する東京大学経済学図書館で 2013 年 9 月にグ

ループ学習室をスタートさせるにあたっても参考となった。また東京大学附属図書館では新図書館建設を計画しているが、新しい図書館のあり方を考える上でも学ぶべき点が多い。

2. British Library の保存業務

BL の *Center for Conservation* を見学する *Conservation Studios: Behind the Scenes Tours* に参加した。月に 1 度の開催で無料、時間は約 1 時間、予約が必要である。館内見学が有料であるのに対して無料であるのは面白く感じた。

保存修復部門の作業場では多くの技術者がそれぞれ資料を修復していた。

洋書の修復には和紙が使われていた。繊維が長くてよいとのことである。洋書を修復していた職員は見栄えを良くするよりも元と同じような色を塗ると語っていた。一方別の職員は到着したばかりのプラスチックが支えに使えないかと新しい素材を積極的に試していた。筆者はこれまで経済学部資料室のほか東京大学史料編纂所、九州国立博物館などで保存の現場を見てきたが、工房のようなフロアや地道な作業を根気よく行う職員の姿など共通の雰囲気を感じた。

修復すべきものは無限にあり、職人気質の作業が行われていれば、時間や予算が不足するはずで、どのように優先順位を決めているのか疑問であったが責任者の説明で解明した。

年に一度責任者の元に各部門から修復依頼が寄せられる。通常の修理（利用者による破損など）のほか展示のための修理などである。これにかかる人員と時間を勘案しながら適切な修復方法を決定する。場合によっては次善の方法を採用することもある。これにより年間計画をたて、年度末に結果を上層部に報告

する。計画と実際の時間は9割以上の精度で一致するとのことであった。修復、保存が図書館業務の中に位置づけられていることが理解できた。

3. The School of Oriental and African Studies, University of London (SOAS) Library



SOAS Library

SOAS（ロンドン大学東洋アフリカ研究学院）はアジア、アフリカ、中近東を研究対象とする教育研究機関である。これらの地域から多くの留学生、研究者を受け入れている。図書館の蔵書は120万冊以上で地域資料のほかアジア・アフリカ・中近東に関するグローバルなテーマ（民族、比較宗教、国際政治など）の資料、電子ジャーナル、データベースの収集にも力を入れている。東京大学新図書館で計画されているアジア研究図書館においてSOAS Libraryは参考にすべき図書館の一つであろう。

Japan and KoreaのSubject Librarianである小林富士子氏の案内で館内を見学した。地上5階、地下1階。開架式である。地域別の蔵書（アフリカ、韓国、中国・内陸アジア、日本、東南アジア、中東・中央アジア・イスラム、古代中近東・セム・ユダヤ）のほか主題

別の蔵書（法律、美術）がある。開架書架は不足しているが、パソコンが使える閲覧機の増設も求められており、書架が撤去された場合の図書の行先、利用について懸念されていた。モノとしての図書と電子資源とのバランスは図書館共通の課題のようである。

続いてBeth Clark氏（Head of Electronic Services Librarian）、Vicky Bird氏（Subject Librarian /Economics, Politics, Finance & Management）と面会し、Bird氏と利用者教育やレファレンス、経済学関係のデータベースについて話をした。

SOASでの取り組みは刺激的であった。図書館の使い方やデータベースの知識が身に付く課題演習、予約制の個別レファレンス受付など様々な方法が用意されている。利用者に情報をうのみにするのではなく、情報を「評価」することを学んでもらいたいという言葉が印象的であった。図書館員がどこまでレファレンスに関われるのかを日頃考えている中で、いくつかのヒントを得た。経済学図書館でのレファレンスサービスに生かしたい。事前準備と英語力の不足で経済学図書館でのサービスについて十分に説明できなかったのは残念であった。

4. The London School of Economics and Political Science (LSE) Library

LSE（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス）は東京大学大学院経済学研究科との国際交流協定校である。その図書館は世界最大規模の社会科学専門図書館で、ロンドン中心部のビルの中にあり、2001年に新しくオープンした。建物を貫く螺旋階段が特徴的である。365日24時間開館している。蔵書396万冊、電子ジャーナル、電子ブック、データベ

ース、DVD 等 50,000 点、古文書等 3,000 点を所蔵している。



LSE Library のある建物

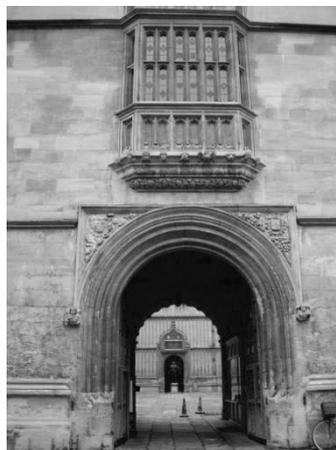
LSE 交流担当の Annette Haas 氏を介して許可を得ていたもので、案内はないものの入館、見学ができた。地下 1 階、地上 4 階。フロアは会話、携帯電話禁止の silent zone、静かな会話ならよい quiet zone、グループ学習の場にゾーンわけされている。食事禁止、飲み物はこぼれないものは可。ワークステーションが設置された机が地下～3 階まで多数ある。地下だけでも 200 席以上あった。そのほか電源、ネットワーク接続できる机があり利用者は持ち込みのパソコンを使って学習している。雨と試験前のためかワークステーションやパソコンが利用できる机には空きがないほどの混みようである。端末に向かって学習する学生たちの螺旋階段からの眺めは壮観であった。

当初は LSE 教授の Janet Hunter 氏と面会し、図書館について話をうかがう予定であったが、氏のスケジュールが急遽変更になり実現しなかった。残念である。メールで話をうかがい、日本で後日お目にかかった。氏によると春と夏の試験期間はあまりに混むので教員は利用を避けることもある、学生のオンラインへの依存を懸念しているとのことであった。

学習スペースの在り方、電子ジャーナルやデータベースの利用の環境において先進的な図書館であった。

5. Bodleian Library

ボドリアン図書館はオックスフォード大学の図書館の一つである。1602 年開館、ヨーロッパでも有数の伝統を持つ。イギリスに 6 つある法定納本図書館の一つで、蔵書は 1,100 万点を越す。



ボドリアン図書館中庭への入口

今回は Upstairs, Downstairs at the Bodleian Library というツアーに参加し、ボドリアン図書館のうち old library を見学した。インターネットでの予約が可能で費用は 13 ポンド、所要時間 1 時間半である。

ディヴィニティ・スクール (The Divinity School) の建物からスタートしてそれぞれの場所の由来が語られる。2 階にあるハンフリー公図書館 (Duke Humfrey's Library) はボドリアン図書館のルーツとなる建物の一つで 15 世紀半ばに建てられた。書架、閲覧机、天井の装飾、革装丁の図書、全てが圧倒的な歴史の重みを感じさせる。そしてその建物が今もそのまま閲覧室として利用されているのである。

隣のラドクリフ・カメラ (Radcliffe Camera) も見学する。18 世紀に John Radcliffe の遺志に基づき建造された円形の図書館で、現在も図書室として利用されている。地下には書架が増設されており、検索用のパソコンもあった。old library と地下通路でつながっている。

案内の職員の方は、保存業務を担当しているとのことであったが、世界中から利用者が訪れ写本、図書を閲覧しているのだと誇らしげに語ってくれた。歴史ある建物の中で、資料の閲覧の歴史が続いていく。図書館が歴史的な場所であることを改めて認識した。

6. まとめ

4 つの図書館を訪問することができた。同行者のない、初めての海外出張であったため不十分な面が多々あったが、国立図書館、大学図書館、新しい図書館、歴史的な図書館、町の中心部にある図書館、郊外にある図書館と様々な図書館を自身の目で見、関係者の話が聞けたのは収穫であった。現在勤務している経済学図書館でのサービスの向上、東京大学附属図書館での新しい図書館のあり方を考える上で多くの視点を与えられたと考えてい

る。今後の業務に反映させていきたい。

このような機会を与えてくれた東京大学大学院経済学研究科に改めて感謝したい。月並みではあるが「実際にみること」の意義は大きい。今後もこのような経験ができる職員が現れることを期待している。

また出張を計画するにあたってお世話になった方々にもお礼を申し上げたい。訪問先の選定については東京大学附属図書館の何人かの方々にアドバイスをいただき、手続きや連絡先の紹介では経済学研究科の事務の方々に手伝っていただいた。一人ではとても実現できなかった出張である。

そして最後に、1 週間もの間、東京を離れてイギリスの図書館を歩き回ることを許してくれた経済学図書館のメンバーと家族に感謝を表したい。

(にしむら さとこ：東京大学経済学図書館
図書運用係長)